

# 山梨県立文学館 館報

1989(平成元)年  
11月 創刊

第112号



富士山の祭神  
特設展「作家の愛用品」  
特設展「文学の中の富士山」(仮称) 展示  
資料より  
閲覧室より・寄贈資料より

清雲俊元

4 3 2

館からのご案内  
教育普及事業より  
やまなし文学賞結果・  
「資料と研究」第二十六輯目次  
館の日誌 利用のご案内

8 7 6 5

## 特設展 「作家の愛用品」 開催

会期 2021(令和3)年4月24日(土)～6月20日(日)

作品の執筆や、日常生活、趣味など、作家が様々な場面で愛用した品から、作家の暮らしや作品に思いを馳せ、作家自身に感じてもらう展覧会。愛用した品々にまつわるエピソードや作品とともに紹介する。

樋口一葉(一八七二～一八九六)は、私塾萩の舎で和歌や古典文学の素養を身につけ、職業作家になることを目指し、二十四年の短い生涯で数々の名作を残した。一葉の愛用した笄、髪飾り、櫛からは、和装に合わせた明治期の女性の髪型が思い浮かんでくる。



樋口一葉愛用の笄、髪飾り、櫛  
当館蔵

飯田蛇笏(一八八五～一九六二)旧蔵の硯は、句会に用いられたもの。小ぶりの五つの硯は重ねて一まとまりにできる造りで、一番上の硯には蓋がついている。墨をためる墨池の形が丸や四角などそれぞれ異なっているのが面白い。

このほか、芥川龍之介の財布、太宰治のノート、深沢七郎のギターなど、当館収蔵の作家の愛用品を展示する。

### 関連イベント

・ワークショップ  
はんこ彫り(篆刻)をしよう

5月16日(日)午後1時30分～3時30分

分

講師 望月煌雅(甲州手彫印章伝統工芸士・一級印章彫刻技能士)

会場 研修室 定員20名(小学校4年生以上) 材料費500円

※4月13日(火)よりお電話でお申し込みください。その際、はんこに彫る漢字一字をお聞きます。先着順で定員になり次第、締切となります。

※4月13日(火)よりお電話でお申し込みください。その際、はんこに彫る漢字一字をお聞きます。先着順で定員になり次第、締切となります。

## 特設展 「文学の中の富士山」 (仮称) 開催

会期 2021(令和3)年

7月17日(土)～8月29日(日)

詩歌や散文など文学作品に数多く描かれてきた富士山。本展では、こうした様々な富士山の姿を、当館収蔵資料により紹介する。

芥川龍之介が旧制第一高等学校時代に書いた随想、山中湖畔の山荘に滞在した高浜虚子の俳句、富士北麓で生まれた育った体験をもとに少年期の友情と成長を描いた中村星湖の小説「少年行」、草野心平の富士山を詠んだ詩や絵画な



草野心平画 「黒富士」水彩

当館蔵

ど、文学作品に登場する様々な富士山をとりあげる。

### 関連イベント

・ワークショップ  
スノードームをつくらう

7月18日(日)午後1時30分～3時30分

分

講師 穂坂優(ハンドメイド作家)

会場 研修室 定員20名(小学生以上) 材料費500円

※お電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第、締切となります。

### ・閲覧室資料紹介 「入場無料」

「富士山に魅せられた作家たち」

7月17日(土)～8月29日(日)

## 特設展 「飯田龍太展 生誕100年」

3月21日(日) 開催中

生誕百年を迎えた飯田龍太の俳句や随筆の魅力を見つめ直すとともに、笛吹市境川の自宅・山廬での生活の様子や、幅広い交友など、龍太の素顔を紹介する。

一月二十四日(日)の飯田秀實氏(龍太長男・山廬文化振興会理事長)の講演会「普段着の龍太」では、龍太の日常生活が身近にいた家族の視点から語られた。

# 富士山の祭神

富士山の世界文化遺産登録については、平成十五年(二〇〇三)に国の検討会で、富士山が世界自然遺産候補地から除外された。そのため、世界遺産登録へのハードルは相当に高いとの印象が拭えなかった。

そうした中、全国からも霊峰富士山をなんとか文化遺産として登録したいという人達の機運が高まり、平成十七年十二月、山梨・静岡両県合同会議が開かれ、富士山世界文化遺産登録に向け始動した。

翌十八年には「富士山世界文化遺産二県学術委員会」が発足した。山梨県にあっては、文化遺産への研究も全くないままに着手され、県庁内を奔走してやっと平成二十年「山梨県富士山総合学術調査委員会」(調査会)が発足して、富士山ならびに周辺の考古、歴史、民俗、文学、自然など各分野に亘って県内外から専門の研究者を招聘し調査研究を行った。この調査研究会によって推薦書の提出を予定より一年早めることに寄与したと自負している。

こうして平成二十四年一月にユネスコ世界遺産センターに推薦書を提出することができた。多くの関係者の努力と協力によって到底果たすことのできないと思っていた仕事が成就したのである。平成二十五年六月二十二日、世界文化遺産「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」として誕生することができた。

調査会は現在でも続けられており、富

# 清雲後元

土山の調査研究は苦しい仕事ばかりではなく、新発見もあり、世界遺産を契機に富士山の各種の研究が進んだ。

現在全国に浅間神社は一三〇〇社ほどあるが、多くの神社の祭神は「木花開耶姫」と呼称されている。この祭神の呼称の起源は『古事記』『日本書紀』によるもので、古くから言われていたと誰もが信じていた。しかし古くは富士山の祭神としての記録は見られない。

竹谷鞆負氏の『富士山の精神史』によると、浅間神社の祭神が木花開耶姫と結びついたのは江戸時代初期のことである。こうした思想を主張したのは廃仏毀釈を唱えた人たちであり、とくに朱子学者の林羅山であった。元和二年(一六一六)に著した『丙辰紀行』の中で「富士山の大神をば木花開耶姫と定め申さば日本紀のころにもかなひ申すべきなり」と自ら定めている。

従って江戸中期以降になって浅間神社の祭神は木花開耶姫に統一された。富士山への信仰は遙拝から始まった。古代の富士山は噴火や溶岩流出を繰り返す、恐ろしく神秘的な山そのものが祭神であった。八世紀の後半以降歴史書に富士山の記事が見えるようになった。

『続日本紀』の天応元年(七八一)の記事が最も古い「駿河国言す 富士山の下に灰を雨す灰の及ぶところは 木葉彫萎す」ときわめて簡単である。古く「福慈神」と言われた神が「常陸風土記」では「浅間神」(浅間明神)の名をもって呼ば

れるようになった。また富士山の祭神は「女神」であると古くから言われてきた。

富士山総合学術調査会の平成二十三年三月報告会が開催され、石田千尋委員から「古典文学の富士山を読み解く」と題して発表があり、平安時代の初期の都良香(八三四〜八七九)が著した『富士山記』(『本朝文粹』)を取り上げた。

貞観十七年(八七五)十一月五日に吏民旧きに仍りて祭を致す。日午に加へて天甚だ美しく晴れる。仰ぎて山の峯を觀るに白衣の美女二人有り、山の嶺の上に及び舞ふ、嶺を去ること一尺余り士人共に見きと、古老伝へて云ふ、山を富士と名づくるは、那の名に取れるなり、山に神有り、浅間大神と名づく云々とある。このように都良香は山を富士山と名づけ、祭神を浅間大神といった。

それは富士山が噴火して山頂から出る煙があたかも白衣をまとった美女が山頂で舞い踊る情景に見えたのであろう。

こうして石田委員の話を拝聴して数日後、県文化財審議委員の鈴木麻里子委員から思わぬ調査報告があり驚いた。

平成二十三年に南アルプス市教育委員会が実施した旧甲西町の神社の悉皆調査のおり、江原浅間神社の調査をしたところ、十一世紀に造立されたと考えられる全国で最古の浅間神社の女神像が発見されたのである。

女神像は総高四〇・〇センチメートルの木造で一木造で彫眼、調査された鈴木委員によると木造の女神を三方に配して、それらの上から如来像の頭部を表す姿は全国的にも例を見ない特異な姿であったという。女神はいずれも髪を長く垂らし、両手を胸の下で合わせる。都良香が著した『富士山記』の中に出てくる美女の舞う姿であったと言われた。

世界文化遺産登録を前にして大発見をした関係者は、思いもよらない女神像の出現に富士山の不思議な力を感じた。文化庁は直ちに重要文化財に指定した。

九世紀後半に成立した『竹取物語』に出てくるかぐや姫伝説からも、富士山の女神像として信仰が広がっていった。物語の最終の場面で、天女となって月の世界へと旅立つかぐや姫を帝が惜しみ、彼女が残した不死の薬を天上に最も近い富士山の頂上において焼くように命じた。さらに物語はその煙が今も富士山山頂からたなびいていと伝えていた。このように『竹取物語』のかぐや姫から想像した女神像が各浅間神社に造立されていったのである。

富士山の北面で古い女神像は忍野村忍草浅間神社に伝わる女神像(鎌倉後期正和四年(一一三五)「伝木花開耶姫像」)「伝鷹飼像」「犬飼像」(共に重要文化財)の三軀である。また『甲斐国志』によると富士山二合目の御室浅間神社の本宮には鎌倉時代文治五年(一一八九)と建久三年(一一九二)の紀年銘をともなう日本武尊像と女神像が伝わったことを記している。また上吉田の北口本宮富士浅間神社には、明治初年に記された社誌に社室の中に神像二軀が見え、その中の一軀は貞応二年(一一二二)の墨書のある女神像であったことが記録にある。

また熱海市の伊豆山神社にも明德五年(一二九四)に造立した男女の神像二軀がある。

こうして見ると中世にあっては、富士山の周辺の浅間神社では、次々に『竹取物語』の説話をとりこみ、祭神として祀られていったのである。

(富士山世界文化遺産学術委員会委員)

# 展示資料より

## 特設展「作家の愛用品」

展示資料より

太宰治「創作年表」ノート

寄託資料

太宰治(一九〇九〜一九四八)が、発表した作品や出版社からの依頼を、「最新家計簿乙種(一九三四年一月 泰東閣書房)」に記したものだ。

作品の記録は一九三三(昭和八)年の「魚服記」から始まり、「改造」一九四七年十月号に発表された「おさん」までが記されている。一九三九年頃からは原稿の注文が書かれるようになり、掲載が延びたり、断った注文には、取り消し線が引かれていて、戦後の一九四六年頃からは、特に執筆の依頼が増えている。また、見返しや余白には、構想中の作品の題名やメモなどが書き込まれている。

津島美知子『回想の太宰治』(増補改訂版一九九七年八月人文書院)には、一九四五年七月六日の甲府空襲で避難する際に、書きかけの原稿とともに太宰がこの



ノートを持ち出し、「戦時下にためむことなく書き続けた作家のなまの記録として、太宰の遺品中、この手ずれた一冊ほど貴重なものはない。」と記されている。

深沢七郎 愛用のギター

「瑞雲」(手前)と「古稀」

寄託資料



深沢七郎(一九一四〜一九八七)は、山梨県立日川中学校(現・日川高等学校)在学中にギターを弾き始め、戦後、ギターリストとして、日劇ミュージックホールなどで演奏するようになった。七郎が愛用したギター「瑞雲」と「古稀」は、バイオリン製作で名高い宮本金八(一八七八〜一九七〇)によりそれぞれ一九四四年と一九四七年に作られた。

七郎は「ギターを弾くことは病むことと同じだと私は思う。どう抵抗しても弾くことはやめられない。」「小説を書くことも、また、病気だと思う。書きたくなる衝動も普通の状態ではないようだ。」「(私とギター)より」と述べている。

(学芸課 中野 和子)

## 特設展「文学の中の富士山」

(仮称) 展示資料より

芥川龍之介「富士山」原稿

館蔵

芥川龍之介(一八九二〜一九二七)が、第一高等学校二年時に書いた原稿。署名の上の「一、二、三」は「第一部二年三之組」を表している。中央に「高等学校作文用紙」と印刷された縦二四・二センチ×横三二・七センチの「二高堂鬼澤製」の朱色罫線入原稿用紙三枚に墨筆で書かれている。所々に教授の手による朱筆が見られる。

「わが五才の昔なり」の一文で始まり、日本橋の商家を雑祭の客として訪問した



折りに、目にした情景を綴っている。江戸情緒を残す掘割や三味線の音色などをゆかしく思いながら、「我うれしかりしかすかかに紫だてる弥生の空にほの白き富士の山の姿を見出し時なれ」と記している。成長し、これまでに、何度も富士を眺めているが、思い出すのは「この幼き日の富士」であり、「古を今によびかへすべきよすがもがな」と結んでいる。

生まれて間もなく、現在の墨田区両国の母の実家芥川家で育てられ、幼少期を過ごした芥川にとって、この時の富士の姿は、愛する大川(隅田川) 端の光景とともに「幼き日の快き追憶の夢」として胸に刻まれた。

芥川は、この作文を書いた高等学校二年の一九一二(明治四五)年四月に、友人と富士裾野を訪れている。文中の「裾野の春にうす緑りの草をふみて」富士を望んだという一節は、その時の実体験をもとにした描写とも思われる。

第一高等学校で芥川と同級だった井川恭(結婚後は恒藤姓一八八八〜一九六七)が、同じ原稿用紙を使用して書いた「富士山」原稿が、大阪市立大学恒藤記念室に所蔵されている。

(学芸課 保坂 雅子)

## 閲覧室より

### 資料紹介展示

#### 「コロナ禍のこの一年」

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大にともない、その対策に明け暮れた一年でした。コロナ禍にあっても安心して資料を手に取り、楽しんでいただくためにはどうしたらよいか検討に検討を重ねました。

しかし、緊急事態宣言により、閲覧室の閉室が余儀なくされ、前年度から準備していた「飯田龍太の世界」(会期：四月二十三日～六月二十一日)は延期、文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「土橋治重」(会期：四月十七日～五月八日)は中止となってしまいました。「飯田龍太の世界」は、延期とはいえ、いつ開催できるかわからない状況でした。

このような中、六月二十三日からようやく、閲覧室の利用が再開できることになりました。

今年度の一回目の展示は、文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「太田黒克彦」(会期：六月二十六日～七月十六日)でした。閲覧者が滞留して密にならないよう、スペースも例年の二倍ほど使い、展示間隔も大幅に広げました。また、利用

後の消毒がし易いように資料や箱などすべてに透明のカバーをかけました。手に取ってご覧いただいた資料は、すぐに消毒液をしみこませたペーパーで拭き取り、テールもその都度消毒を行いました。

続いて、「富士北麓をめぐる文学」(会期：八月一日～八月二十七日)を開催しました。例年は百点程度の資料を紹介していましたが、今回は二十点程度に減らし、大型本や装丁の美しい本など、展示数が少なくても、見応えのあるように工夫をしました。

秋には、企画展「まるごと林真理子展」にあわせて「林真理子を読む」(会期：九月十一日～十一月二十三日)を開催しました。林さんが書いたイラストをしおりやキャプション(説明文)に使用したことで、企画展との一体感も生まれ、カラフルで華やかな展示になりました。林さんの人気との相乗効果で、ご覧くださる方も大幅に伸びました。

そして、遂に待ちに待った時がやってきました。延期となっていた「飯田龍太の世界」(会期：一月二十三日～三月九日)が開催の運びとなりました。約五十点の資料紹介でしたが、ただ資料を見るだけでなく、手に取りページをめくっていただける工夫もしました。また、展示をより楽しんでいただくために資料に

ちなんだクイズに答えていただき、参加された方に手作りのしおりとメモをプレゼントしました。

このように工夫と改善を繰り返しながら展示を楽しんでいただけるよう努めています。

こうして、三月には、今年度最後の展示「文学に描かれた天災」(会期：三月十日～四月四日)が開催されます。これは、全国文学館協議会の第九回共同展示「3・11文学館からのメッセージ」に参加したものです。コロナ禍のこの時期に是非、見ていただきたい展示です。多くの方のご来館をお待ちしています。

(資料情報課 外川 豊子)



### 「寄贈資料より」

(令和二年八月～三年一月)

- 最光蝕氏より「文芸随想」原稿ほか特殊資料六六六点、図書二点、雑誌一点。
- 高城純一氏より「辻邦生氏を悼む」新聞切り抜きほか四点、図書一点、視聴資料一点。
- 廣瀬町子氏より石原舟月「風花のかゝりて青き目刺買ふ」短冊ほか一五一点。
- 竹内正直氏より熊王徳平「歌集独り」ほか二点。
- 帶野賀代氏より中村星湖「怒るなと母か諭せし言の葉のかなしからすやなほ耳にあり」色紙ほか一点。
- 渡辺美恵子氏より岡本辰美、岡本倭一旧蔵飯田蛇笏「深山木に雲ゆく蟬のしらへ哉」軸装。
- 齋藤喜美子氏より北杜夫宛津島里子葉書ほか特殊資料五点、図書五二点、雑誌一点。
- 横田幸子氏より萩原英雄名刺ほか特殊資料二点、図書三九点。
- 横川翔氏より「大正期「日本主義」者の連携―三井甲之と岩野泡鳴―」抜き刷りほか二点、雑誌一点。
- 志村史夫氏より中村星湖「川中島合戦」額装ほか三点、図書二八点。

# 館からのご案内

※新型コロナウイルスの感染拡大の状況により、各催しを延期(または中止)等変更する場合があります。

## ■教育普及事業

### ○年間文学講座

講座1・2とも研修室で定員40名 無料  
午後2時〜3時30分

講座1「2021―古典文学入門―」

・講師 長瀬由美(都留文科大教授)

5月28日(金) 枕草子入門

6月25日(金) 源氏物語入門

・講師 加藤敦子(都留文科大教授)

7月9日(金) おくのほそ道

8月20日(金) 近松門左衛門『心中天網島』

・講師 佐藤明浩(都留文科大教授)

9月24日(金) 百人一首をよむ

・講師 寺門日出男(都留文科大教授)

10月22日(金) 唐詩入門

・講師 鈴木武晴(都留文科大教授)

11月19日(金) 上代文学と絵本

12月17日(金) 上代文学と絵本

講座2「ジャンルを超える文学の可能性」

講師 大村梓(山梨県立大学国際政策学部国際コミュニケーション学学科准教授)

5月15日(土) 文学作品に描かれる消費社会像―谷崎潤一郎『青い花』

6月19日(土) 文学作品に描かれる都市―川端康成『浅草紅団』

7月17日(土) 村岡花子の短歌と翻訳

8月21日(土) 家族像の変容―吉本ばなな『キッチン』

・9月25日(土) 俵万智のチョココレト世界観―短歌と現代語訳

10月16日(土) ミステリー小説の系譜―江戸川乱歩から東野圭吾まで

11月6日(土) 村上春樹の描く日本―日本語と英訳の狭間で

12月18日(土) 近現代詩と他ジャンルの出会い―モダニズム詩から最果タヒまで

※開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

10月〜1月に4回の予定 定員100名

午後1時30分〜 会場 講堂

※開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

10月〜1月に4回の予定 定員100名

午後1時30分〜 会場 講堂

※開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

10月〜1月に4回の予定 定員100名

午後1時30分〜 会場 講堂

※開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

10月〜1月に4回の予定 定員100名

午後1時30分〜 会場 講堂

※開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

10月〜1月に4回の予定 定員100名

午後1時30分〜 会場 講堂

※開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

10月〜1月に4回の予定 定員100名

午後1時30分〜 会場 講堂

※開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

10月〜1月に4回の予定 定員100名

午後1時30分〜 会場 講堂

※開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

10月〜1月に4回の予定 定員100名

午後1時30分〜 会場 講堂

※開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

10月〜1月に4回の予定 定員100名

午後1時30分〜 会場 講堂

※開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

10月〜1月に4回の予定 定員100名

午後1時30分〜 会場 講堂

※開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

10月〜1月に4回の予定 定員100名

午後1時30分〜 会場 講堂

※開催日の2週間前からお電話でお申し込みください。先着順で定員になり次第締切となります。

10月〜1月に4回の予定 定員100名

室で期間限定展示を次のとおり行います。

・春の常設展 信玄生誕500年関連展示

3月9日(火)〜6月6日(日)

・夏の常設展 現代の作家

林真理子 6月8日(火)〜8月29日(日)

・秋の常設展 現代の作家

辻村深月 8月31日(火)〜11月28日(日)

○第五室(展示室B)の展示替え

山梨出身・ゆかりの文学者104名を2期に分けて展示。

・小説・評論・随筆・翻訳・ジャーナリズム・戯曲・脚本・童話・童謡

4月3日(土)〜8月29日(日)

・詩・短歌・俳句・川柳・漢詩

10月2日(土)〜3月6日(日)

※第五室は2021年3月10日(水)〜4月2日(金)は休室します。

○閲覧室「入場無料」

○閲覧室資料紹介

・「文学に描かれた天災」

3月10日(水)〜4月4日(日)

・「文学の中の武田信玄」

4月6日(火)〜6月13日(日)

○文学者の誕生日にちなんだ資料紹介

・土橋治重(4月25日生まれ)

4月16日(金)〜5月7日(金)

・熊王徳平(6月15日生まれ)

6月11日(金)〜7月1日(木)

・保坂耕人(8月27日生まれ)

8月27日(金)〜9月16日(木)

○書庫見学

6月5日(土)

①午前11時〜、②午後2時〜

○飯田秀實氏より飯田龍太印譜。

次の皆様からも図書・雑誌をご寄贈いただきました。(敬称略)

新井 芳子 佐野 秀延

石崎 等 下島 大輔

石原 健二 鈴木 正樹

一瀬 茂 高橋 千恵

井出 京子 高安 勇

伊藤 亮 谷本 直

井上 隆 土橋 寿

井上 芳寛 中西 夕紀

海老井 英次 中村 吾郎

大屋 達治 中村 恵

小川 美知子 濃野 初美

沖 ななも 秦 恒平

奥山 和弘 平松 伴子

鍵和田 務 備仲 臣道

窪田 喜久子 藤田 三男

小磯 仁 古屋 正作

小林 建雄 松本 章男

小山 弘明 三橋 透

三枝 浩樹 山本 育夫

佐藤 真佐子

この他に団体の方々からもご寄贈いただいております。



令和2年度の教育普及事業報告

◇「まるごと林真理子展」関連事業

企画展「まるごと林真理子展」の会期中に計四回、林真理子氏を講師に迎えた催しを開催した。

9月11日(金)には三枝昂之館長が聞き手を務めオープニングトーク「『まるごと林真理子展』に寄せて」を開催。9月27日(日)に作家の辻村深月氏との対談「物語をつむぐ時間」、11月1日(日)に講演会「本棚のある風景―林書房と私」、そして11月13日(金)には追加講演会「小説に描いた人々」を開催した。

また、年間文学講座でも10月17日(土)に大木志門東海大学文学部教授の「林真理子『女文士』

―評伝文学の魅力―を、中野和子学芸員の講座として、9月22日(火・祝)に「林真理子作品の女性たち」を開講した。

◇「飯田龍太展生誕100年」関連事業

1月24日(日)に講演会「普段着の龍太」、1月30日(土)にシンポジウム「飯田龍太を語る」を開催した。

講演会は飯田龍太の長男で山盧文化振興会理事長の飯田秀實氏を講師に当館高室有子学芸幹が聞き手を務めた。シンポジウムは井上康明氏と瀧澤和治氏が登壇し、中西夕紀氏と高柳克弘氏をオ



ンラインでつないで開催した。四人の俳人が龍太の俳句と散文について、様々な視点から発言、龍太の魅力に気づいたり作句への意欲を持たれた方が多くいた。

◇文学創作教室 三枝昂之館長・三枝浩樹氏による短歌講座

9月5日(土)と12月19日(土)、短歌経験者のレベルアップを目的として短歌講座を行った。二つの講座はそれぞれ単独で募集を行い、9月は三枝館長、12月は三枝浩樹氏(歌人・沃野)代表が講師を担当した。

9月は一般19名、高校生5名が、12月は一般25名、高校生5名が参加した。

前半は短歌の詠み方に関する講義、後半は参加者が事前に提出した歌を講師が批評する形で進められた。参加者アンケートには、読む人による解釈の違いにおもしろさを覚えたという感想や、創作への意欲につながるアドバイスへの感謝の言葉が書かれていた。

また初心者のための短歌教室を三枝浩樹氏を講師に、10月24日(土)、11月21日(土)に行い、2回の連続講座で19名が参加をした。

◇ワークショップ

・夏のワークショップ  
「富士山×ハーバリウム」

中止となった夏の特設展「文学の中の富士山」の関連イベントであった「富士山×ハーバリウム」を、7月25日(土)に予定通り開催した。カラーサンド&フ

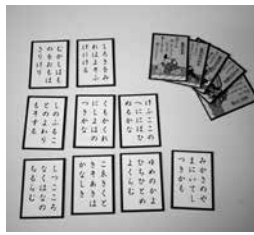
A主宰の三嶋勝美先生を講師に迎え、小学生から大人までの二〇名が参加した。

緊急事態宣言解除後、施設の再開をしてから初めてのイベントで、感染症対策を講じ無事に終了した。

・冬のワークショップ

「第十一回新春小学生百人一首教室」当館のワークショップの中で最も歴史のある百人一首教室を、今回も竜王かるた会の8名を講師に迎え、1月9日(土)に開催した。コロナ禍の中、例年とやり方を変えて

テーブルもかるたも家族単位に限定しての活動としたが、和気藹々と楽しそうに取り組む姿が印象的だった。



◇博学連携事業

・出前授業(職員による出張講座)

今年度は「山梨の文学」「短歌を作るたのしみ」「俳句を学ぼう」「短歌をよむ」「文学とスポーツ」「宮沢賢治」の講座を次の学校で開催した。

中央高(3講座)・富士河口湖高・甲陵中・若草中(4講座)・七保小(3講座)



・移動文学館(貸出順)

石川啄木等身大パネルセット

市川中・中央高・市川南小・七保小(4校)

飯田蛇笏・龍太ちまちな人形セット  
中央高・若草中(2校)

村岡花子と「赤毛のアン」セット  
市川東小

宮沢賢治イーハトーブの世界セット  
市川東小・市川南小・国母小・七保小・善誘館小(5校)

芥川龍之介の夏休みセット  
中央高・甲府工業高(2校)

文豪ストレイドッグスセット  
中央高・田富中・甲府昭和 high・吉田高・市川南中(5校)

・教師のための学習会  
①10月22日(木)

企画展「まるごと林真理子展」の解説と観覧  
講師 中野和子(当館学芸員)

②1月26日(火)  
特設展「飯田龍太展 生誕100年」の解説と観覧

講師 保坂雅子(当館学芸課長)

・来館実績

(館内学習プログラム・来館順)

山梨英和中・山梨英和高・泉中・甲府東小・小淵沢中・南部中・甲斐清和高・笛川中・押原中・松本深志高・甲西中・秩父吉田小・白州小・猿橋中・若草中・山梨学院小・奥野田小・白根御勅使中(18校)

樋口一葉記念

第二十九回

やまなし文学賞結果

一、応募状況

本文学賞は、山梨県と深いゆかりを持つ樋口一葉の生誕百二十年を記念して、山梨県の文学振興と、日本の文化発展を図る目的をもって、平成四年に制定された。今回も小説募集と研究・評論の推薦を受ける二部門で実施した。選考委員は小説部門が坂上弘・佐伯一麦・長野まゆみ、研究・評論部門は、中島国彦・関川夏央・兵藤裕己の各氏。

小説部門の応募作品数は220編。うち男性は165編、女性は55編。山梨県内からは23編だった。

研究・評論部門の推薦延数は119編。うち自薦が16編(単行本15冊 雑誌掲載1編)、他薦が103編(単行本99冊雑誌掲載4冊)だった。

二、選考結果

選考会は、研究・評論部門を二月八日に都道府県会館で、小説部門を二月十二日にオンライン会議によりそれぞれ行い、受賞作を決定した。選考結果の発表を、三月二日に行った。

小説部門のやまなし文学賞には副賞として、百万円、同佳作二編には各三十万円、研究・評論部門のやまなし文学賞

二編には各五十万円が贈られる。

また、小説部門の三編は山梨日日新聞紙上及び同紙電子版に掲載、やまなし文学賞「銀ぎつね」は単行本として刊行する。

なお、表彰式は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止となった。

◆受賞作品◆

小説部門

□やまなし文学賞

・「銀ぎつね」

田村修宏(栃木県在住)

「受賞の言葉」

今度、いわゆる東北弁をどう扱うかに腐心しました。生そのまま表記したのでは、三割も意味が通じない恐れがあります。これは何も東北弁に限ったことではないかも知れません。方言を扱うときは、プロの作家でも、標準語との混ぜ合わせ具合に神経を配り、それらしい言い回しを作り出しているようです。

私はあえて、自分の耳底に残っている東北弁を、できる限りそのまま表記してみることにしました。しかし、方言のイントネーションを活字にするのは至難の業で、それに拘るとますます分かり難いものになっていきます。私の表記でも、東北弁の達者な、例えば長岡輝子のような人が音声化してくれたなら、ずっと分かり易くなるはずなのです。ともあれ、このようにして作り上げた

作品を、私は誰か然るべき人に一度目を通して貰いたいと思ひ、応募先を探しました。「やまなし文学賞」の選考の方々のお名前に接した瞬間、私は送り先をここに決めました。

この独りよがりな願望を、予備選考で現実のものに近づけて下さった方々、更には最終的に本人の予想を超えた素敵な結果を授けて下さった先生方、それぞれの文学観の奥深さに今は心から敬意を表し、感謝あるのみです。

□やまなし文学賞佳作

・「河童のいた日々」

加藤日出美(北海道在住)

・「カップ酒」

秋野 淳平(埼玉県在住)

研究評論部門

□やまなし文学賞

・井上隆史(白百合女子大学教授)

『暴流の人 三島由紀夫』(二〇二〇年 一〇月 平凡社)

(主な編著)

『三島由紀夫 虚無の光と闇』(二〇〇六年 試論社)、『豊饒なる仮面 三島由紀夫』(二〇〇九年 新典社)、『三島由紀夫 幻の遺作を読む―もう一つの『豊饒の海』』(二〇一〇年 光文社新書)、『もう一つの日本』を求めて―三島由紀夫『豊饒の海』を読み直す』(二〇一八年 現代書館)、『決定版 三島由

紀夫全集 第四二巻 年譜・書誌(共著、新潮社)など。

□やまなし文学賞

・山田俊治(横浜市立大学名誉教授)

ミネルヴァ日本評伝選

『福地桜痴―無駄トスル所ノ者ハ実ハ開明ノ麗華ナリ』(二〇二〇年一〇月 ミネルヴァ書房)

(主な編著)

『有島武郎(作家)の生成』(一九九八年 小沢書店)、『大衆新聞がつくる明治の(日本)』(二〇〇二年 日本放送出版協会)など。

■「資料と研究」第二十六輯目次

A5判九二頁・三月下旬発行

・講演録「本棚のある風景―林書房と私」 林 真理子

・短歌に映った二〇二〇年―コロナ禍のなかの暮らし 三枝 昂之

・飯田蛇笏 高室呉龍宛書簡 翻刻 一九三三(昭和八)年―一九三四(昭和九)年 高室 有子

・井伏鱒二 野上照代宛書簡 翻刻 二

・佐佐木茂索日記「且樂軒記」四 翻刻 中野 和子

・中村屋湖作成スクラップブック ② 保坂 雅子

その一

外川豊子・山形敏貴・中島桂子

## 館の日誌

- 9・9 (水) 出前授業 (若草中学校)  
 9・11 (金) 企画展「まるごと林真理子展」(~11・23)  
 企画展関連オープニングトーク  
 講師 林真理子 (作家)  
 進行 三枝昂之 (当館館長・歌人)  
 閲覧室資料紹介「林真理子を読む」(~11・23)  
 9・12 (土) 年間文学講座2「泉鏡花『外科室』-愛と生と死」  
 講師 大木志門 (東海大学文学部教授)  
 9・15 (火) 秋の常設展 期間限定公開 山梨の文学碑2 芥川龍之介「藤の花軒端の苔の」(~11・2)  
 9・22 (火) 年間文学講座3「林真理子作品の女性たち」  
 講師 中野和子 (当館学芸員)  
 9・25 (金) 年間文学講座1「音読してみる平安文学のカタチ」  
 講師 加藤浩司 (都留文科大学教授)  
 9・27 (日) 企画展関連対談「物をつむぐ時間」講師 林真理子 (作家) 辻村深月 (作家)  
 10・3 (土) 常設展第5室「詩・短歌・俳句・川柳」(~2021 3・7)  
 10・4 (日) 読書会  
 10・17 (土) 年間文学講座2「林真理子『女文士』-評伝文学の魅力」講師 大木志門 (東海大学文学部教授)  
 10・20 (火) 出前授業 (七保小学校)  
 10・22 (木) 教師のための学習会  
 10・23 (金) 年間文学講座1「曹操と漢詩」講師 寺門日出男 (都留文科大学教授)  
 10・24 (土) 文学創作教室「初心者短歌教室」  
 講師 三枝浩樹 (歌人)  
 10・25 (日) 名作映画鑑賞会「こころ」  
 11・1 (日) 企画展関連 講演会「本棚のある風景-図書館と私」講師 林真理子 (作家)  
 11・7 (土) 年間文学講座2「三島由紀夫『金閣寺』と水上勉『金閣炎上』-事件を加工する方法」  
 講師 大木志門 (東海大学文学部教授)  
 11・8 (日) 読書会  
 11・11 (水) 出前授業 (富士河口湖高校)  
 11・13 (金) 企画展関連 追加講演会「小説に描いた人々」  
 講師 林真理子 (作家)  
 11・14 (土) 名作映画鑑賞会「青い山脈」  
 11・27 (金) 年間文学講座1「上代文学と絵本①」講師 鈴木武晴 (都留文科大学教授)  
 12・1 (火) 冬の常設展 期間限定公開 山梨の文学碑3 前田晁「一人の心は万人の心 文化の根源はここにある」(~2021・3・7)  
 12・4 (金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「竹内てるよ」(~12・24)  
 12・6 (日) 読書会  
 12・18 (金) 年間文学講座1「上代文学と絵本②」講師 鈴木武晴 (都留文科大学教授)  
 12・19 (土) 文学創作教室「初心者短歌教室」講師 三枝浩樹 (歌人)  
 1・9 (土) 冬のワークショップ「第11回新春小学生百人一首教室」講師 竜王かるた会  
 1・10 (日) 年間文学講座2「井伏鱒二『黒い雨』-書き得ないものを書く」講師 大木志門 (東海大学文学部教授)  
 1・23 (土) 特設展「飯田龍太展 生誕100年」(~3・21)  
 閲覧室資料紹介「飯田龍太の世界」(~3・9)  
 1・24 (日) 特設展関連 講演会「普段着の龍太」  
 講師 飯田秀實(龍太長男・山廬文化振興会理事長) 聞き手 高室有子 (当館学芸員)  
 1・26 (火) 教師のための学習会  
 1・29 (金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「武田泰淳」(~2・18)  
 1・30 (土) 特設展関連 シンポジウム「飯田龍太を語る」  
 進行 井上康明 (俳人・「郭公」主宰) パネリスト 瀧澤和治 (俳人・「今」代表)、中西夕紀 (俳人・「都市」主宰)、高柳克弘 (俳人・「鷹」編集長)  
 2・28 (日) 大人のための初心者俳句ワークショップ 講師 保坂敏子 (俳人・「今」編集人)  
 3・5 (金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「深田久弥」(~3・25)  
 3・6 (土) 年間文学講座3「山廬を訪れた人々」  
 講師 保坂雅子 (当館学芸課長)

## 利用のご案内

## ■開館時間

- 展示室 9:00~17:00 (入室は16:30まで)  
 ○閲覧室 9:00~16:00  
 ※現在、共同・個人研究室、マイクロ室、ビデオブース、CD・カセット視聴コーナーはご利用いただけません。  
 ○講堂・研修室 9:00~21:00  
 ○茶室 9:00~21:00 (準備・片付けの時間も含まれます)  
 ○ミュージアムショップ 9:30~16:20

## ■休館日等 (3月~9月)

- 3月1・8・15・22・29日  
 ○4月5・12・19・26日  
 ○5月6・10・17・24・31日  
 ○6月7・14・28日  
 ○7月5・12・19・26日  
 ○8月2・16・23・30日  
 ○9月6・13・27日

## ■常設展示室観覧料

	常設展		
	個人	団体 (20人以上)	美術館との 共通券
一般	330円	260円	680円
大学生	220円	170円	340円

※高校生以下の児童・生徒、65歳以上の方、障害者手帳を御持参の方とその介護者1名の観覧料は無料です。

## ※県内宿泊者割引

来館日の前日・当日に山梨県内のホテルや旅館等の宿泊施設

をご利用いただいたお客様対象の割引制度です。予約クーポンや宿泊施設の領収書等を窓口でご提示ください。団体料金でご観覧いただけます。

## ■施設利用のお申し込みについて

- 講堂・研修室・茶室の申込みは、使用しようとする日の6ヶ月前から原則として10日前までです。  
 ☆いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意は申込みの際、ご説明いたします。  
 ○2021 (令和3) 年4月1日 (木) より9月頃まで、講堂は工事のため、貸出を停止させていただきます。申請受付の再開につきましては、決まり次第当館ホームページにてお知らせいたします。

山梨県立文学館 館報 第112号  
 令和3年3月10日発行

編集兼  
 発行人 三枝昂之

発行所 山梨県立文学館

〒400-0065

山梨県甲府市貢川一丁目5-35

☎ 055(235)8080 FAX 055(226)9032

<https://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>  
 ※紙面・記事・写真等の無断転載・転用はお断りします。